

## サルコリの音楽科教育思想に関する研究

—— 丸山徳子から、三浦環、鶴田昭則、丸山洋子への流れを手掛かりに、フレーベルの「父性」に関する考え方を射程に入れて ——

藤田文子\*

(2021年10月22日受理)

Study of Sarcoli's Music Educational Thought –With Flow from Tokuko Maruyama to Tamaki Miura, Akinori Tsuruta, and Yoko Maruyama as Clues, Including Fröbel's Idea of "Paternity" in the Range.

Ayako FUJITA

キーワード:音楽科教育思想, サルコリ, 三浦環, 丸山徳子, フレーベル

本論文は、先行研究の捉えなおしを基に、筆者の歌唱指導研究をさらに進めることを目的とする。そのために、筆者の歌唱指導研究の基盤にある音楽科教育思想を、今一度原点に戻り、探ることとした。その際、昨年度の全学教職センターの論文で取り上げた、サルコリ、丸山徳子、三浦環、鶴田昭則、丸山洋子を再び取り上げ、サルコリから始まった、彼らの音楽科教育思想の流れを手掛かりに、検討することとした。まず最初に、サルコリと養女の丸山徳子を題材にした、『少女の友』の著作「楽人の死」を取り上げ、そこに示されたサルコリの音楽科教育思想について吟味した。その上で、上記四人のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について考察した。それと同時に、「歴史認識と歴史研究」、「三浦環の学習観」など、昨年度の全学教職センターの筆者の論文の課題も、もう一度考察しなおすこととした。その際、筆者の研究テーマである、フレーベルの「父性」に対する考え方も射程に入れることとした。その結果、サルコリの音楽科教育思想は、内容的にも、フレーベルの教育思想に矛盾するものではなく、音楽科教育においても、極めて教育効果が高く、他の教科の指導法にも応用自在であることがわかった。前述の四人においても、サルコリの音楽科教育思想は、理解され、継承、展開されていることがわかった。今後もさらなる発展が望まれることも確認した。

はじめに

---

\*茨城大学教育学部音楽教育教室

筆者は、先行研究、すなわち音楽科の歌唱指導<sup>1)</sup> <sup>2)</sup> <sup>3)</sup>などを吟味し、声帯の健康を重視しつつ、生活に音楽を取り入れ、生涯にわたって音楽を愛好し、充実した人生を送ることができる方法について模索してきた<sup>4)</sup> <sup>5)</sup>。筆者はこういった中で、豊かな現場経験を持つ、茨城大学の非常勤講師である鶴田昭則(以下鶴田と略記[筆者付記])<sup>6)</sup>の歌唱や歌唱指導法に着目し、声帯の発声の健康の問題、歌唱指導、合唱を含むオーケストラの指揮・指導といった器楽指導法、さらには、校歌の作曲など作曲分野での才能の披歴や、校歌指導など、音楽科教育の全範囲に対応できる可能性を見出してきた。

昨年度の段階で、筆者は、なぜ鶴田がこういった問題に対応可能な能力を身につけることができたのかを、主にレッスンを背景に行われた、鶴田の歌唱に関する学習歴に目を向け検討した。その結果、アドルフォ・サルコリ(以下サルコリと略記[筆者付記])<sup>7)</sup>や、サルコリのオペラの共演者であり、弟子でもあった三浦環<sup>8)</sup>、サルコリの養女であり、サルコリの弟子、かつ、鶴田の師であった丸山徳子<sup>9)</sup>などといった、現在にも普遍的に大きな影響を与える歴史的存在があることに行きついた。

一方筆者は、音楽教育史学会のシンポジウム<sup>10)</sup>や、音楽教育学会の学会誌で、今しか残せない、教育的にも、歴史的にも重要な事実・資料を吟味し、検討し、保存していくことの大切さを主張してきた<sup>11)</sup>。

歴史的な存在でありながらも、「現在に生きる」こういった歌唱指導の教育者の影響を、丸山徳子・鶴田のレッスンを手掛かりに検討することは、それに該当することにもなると考えた。

その結果、①「歴史認識と歴史研究」、②音楽科の歌唱指導、ひいては普遍的に応用可能で教育的な観点という二つの観点を指摘することができ、今後の課題を含め、多くの学びを得た<sup>12)</sup>。

本論文は、筆者のこういった昨年度の論文の流れを継承し、さらに一歩進めることを企図することとした。

そのために、筆者の歌唱教育研究の基盤にある音楽科教育思想を、もう一度原点に戻り、探ることから始めることとした。

まず、サルコリの音楽科教育思想に焦点を当て、前述の論文<sup>12)</sup>よりもさらにスパンを広く取ることとした。まず、資料を基にした、生前のサルコリの音楽科教育思想の検討から始まり、丸山徳子、三浦環の音楽科教育思想、さらに現在に生きる、鶴田、丸山徳子の娘さんであり、弟子でもあった丸山洋子<sup>13)</sup>を支える音楽科教育思想へと敷衍して検討することとした。その際に、筆者自身の研究の根幹ともいえる、フレーベルの教育思想、特にそのなかの「父性<sup>14)</sup>」に対する考え方を射程に入れることとした。

従って本論では、1. サルコリの音楽科教育思想について——「楽人の死<sup>15)</sup>」『少女の友<sup>16)</sup>』に描かれた姿を入口に——、2. 丸山徳子のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について、3. 三浦環のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について、4. 鶴田のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について、5. 丸山洋子のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について、まとめにかえて——フレーベルの「父性」に関する考え方を射程に入れて——の順に考察することとする。

なお、本論文は、こういった経緯の中で、当初、生の声を残すという立場から、関係者である、丸山徳子先生の娘さんである丸山洋子先生、鶴田先生への、対面でのインタビューを中心に展開するということが計画されてきたが、折からの新型コロナウイルス感染拡大予防のために、昨年同様、

主にメール等でのやり取りによらざるを得なかったことを付け加えておきたい。

そういった意味で、藤田から鶴田先生への質問と回答という形で論文が展開することをお許しいただきたい。また資料等の入手に関しても制限が多くあったために、現在検討可能な内容に留めたこともご理解いただきたい。

また、鶴田先生の回答に関しては、カンマ等も含めて、鶴田先生の表記に極力従ったことも付記しておきたい。

丸山洋子先生に関しては、ご高齢であること、新型コロナウイルス感染予防の見地からも、電話等による、鶴田先生を介してのご質問、ご意見、ご回答などという形をとらせていただいたことをご了承いただきたいと思う。

### 1.サルコリの音楽科教育思想について——「楽人の死」『少女の友』に描かれた姿を入口に——

まず、筆者が唯一手に入れることのできた、今回のサルコリの音楽科教育思想に関連すると思われる文献を入口に、サルコリの音楽科教育思想について検討することとする。なおこの資料は、丸山洋子先生の提供によることを申し添えておきたい。深く感謝いたします。

書誌的事項に関連して言及すると、この文献は、もともとは、サルコリの養女である丸山徳子先生所持の文献で、継続的に同居なさっていた丸山洋子先生が受け継がれたものの一つである。

この文献は、本論文注15を確認いただければわかるように、黒百合子の著作であるが、極めて丁寧な取材の基に作成されたもので、実際の取材による裏付けが多く多くの場所で感じられる。ここにはサルコリ先生の生前の写真、当時の丸山徳子先生の実際の写真も掲載されている。また『少女の友』は、昭和10年代特に、編集者内山基が主筆(編集長)を務めており、この雑誌の黄金期ともされ、この当時絶大な人気を誇った少女雑誌で、全国津々浦々の女学生で知らない者はいなかったといっても過言ではないものであった<sup>17)</sup>。この文献にあつては、サルコリと丸山徳子が主たる登場人物となっていることで、当時この二人が、全国的に、また世界的にも、いかに重要な人物であったのかが窺い知れる。

ここで検討する内容が、この著作の内容にも関係するため、若干あらすじについても触れておきたい。

「楽人の死」というタイトルからもわかるように、サルコリ(楽人とは、サルコリ先生を示す。著作中ではサルコリーという表記となっている[筆者付記])の晩年、60歳を超えて病を得、亡くなるまでの様子を、同居していた、養女で、愛嬢の丸山徳子(ここでは、永島とく子となっているが、当時の丸山徳子先生の実名は長島徳子である。年齢は、女学校を卒業なさった20歳半ば位か[筆者付記])との関係を軸に展開している。

このなかでは、サルコリと丸山徳子の日常生活が描かれており、サルコリの臨終を迎えるまでの丸山徳子のきめ細やかな看病の様子、サルコリのレッスン風景などが詳述されている。

ここでは、本論の研究テーマであるサルコリの音楽科教育思想に関連すると思われる、1. -1 音楽家、声楽科としてのサルコリの姿について、1. -2 ピアノや声楽の指導者としてのサルコリの姿

について、1. - 3 丸山徳子とサルコリの親子愛についての三点について、以下に言及することとする。

### 1.-1 声楽家、音楽家としてのサルコリの姿について

ここでは、サルコリについて、著名なテノール歌手であった、サルコリならではの記述がある。

「サルコリーが日本にくる以前には、日本に伊太利声楽と云うものは全く伝えられていなかった。サルコリーが来て初めて日本の声楽界は華やかなものになったといっても過言ではない(旧仮名遣いは、基本的に現代の仮名遣い、古い漢字については、基本的に当用漢字とした[筆者付記、以下同様<sup>18)</sup>。)」とある。

また、病床でのサルコリの発声練習についての記述もある<sup>19)</sup>。

「……………三月に入ると、急にめっきり衰えがサルコリーの肉体に現れ始めて、遂に体の自由さえ失われてしまった。もはや口さえも利けなくなってしまった。なのに、寝台に仰向けになっているままの姿で、サルコリーは胸に手をやって、丸く口を開けて、『アーアーアー』発声法をやっているのである。自分の声と声の調子に耳を傾けているのである。」



(マンドリンを弾くサルコリ:丸山洋子氏提供)

これらの記述から、サルコリは、日本

の本の声楽界にあっても、大切な存在であったことがわかる。

また病床にあっても、声楽家として、訓練を忘れなかったことが伝わってくる。

さらに、ピアノに関してもサルコリの厳しい取り組みが感じられる。

「……………みんな間違っている。間違いだらけだ。……………」音楽となると、もう全く夢中になってしまうのが此の老人の性分だった<sup>20)</sup>。」とある。

ここに取り上げたのは、ほんの一部であるが、全編にサルコリの音楽家、声楽家として、音楽に対する厳しい取り組みが、感じられる。

なお、サルコリは、鶴田によると、マンドリンの奏者としても夙に有名で、「慶應義塾大学では、マンドリン・ギターの奏法を教え、その分野の発展のために尽くした<sup>21)</sup>」とされている。上の写真は、サルコリがマンドリンを弾いているところである。

### 1.-2 ピアノや声楽の指導者としてのサルコリの姿について

ここでは、丸山徳子に対する、サルコリの厳しくも愛情に満ちたレッスン風景の描写が見られる。

ピアノのどのような誤りも許さず、サルコリは丸山徳子が泣くまで厳しく叱った。しかしながら、そのままにせず、その場で慰め、励まし、本当の意味での信頼関係を構築する。学習者の高まりすぎた感情が収まり、冷静になるのを待って、学習者である丸山徳子のやる気を起こさせるレッスン

を行っていく<sup>22)</sup>。厳しく叱った後、サルコリは、最後に丸山徳子に次のように言って聞かせている。

「もう叱らない。もう叱らない。泣かなくともいい。」……「今の間違ったところ、明日の晩よく教えて上げるからね。もういい。もう泣かなくともいい<sup>23)</sup>。」と。

ここで重要なのは、単に師としてだけ教えるのではなく、最後は、親の真の愛情から教えているのである。次のような表現がある。

「老人の手には清らかな愛情があった。その愛情が老人の手から、とく子さんの心へ染み込むのだった。『そうだわ。私だって、もっと気をつけていつも褒められるように弾かなくちやいけなかったんだわ<sup>24)</sup>。』と。

ここで忘れてならないのは、ピアノや声楽のレッスンであっても、こと指導法に関しては、音楽科教育の指導法と、本質的には同じであるということである。

すなわち、教員の真摯な指導と、それを信頼し、受け止める生徒の真剣な態度。

最終的には「心の育て」の問題と言ってもよいであろう。

その中では、感情の面から言えば、教員と生徒の間には、激突とも言ってもいいほどの、場面の生まれる可能性がある。

それをいかにして克服し、受け入れてもらい、「先生に褒められたい」、と生徒に言わしめるほどの生徒のやる気を奮い立たせるか、ここが教員の腕の見せ所である。

教員は、一時的には波だったかもしれない生徒の感情の静まるのを待って、生徒の望む内容も十分に踏まえて、適切に指導することが大事であろう。それはやはり、ここで示されたような、教員としての、また親としての、一見激しく見えるが、その底にある、冷静さを失わない、優しい、暖かな心、すなわち、真実の愛以外には無いのではないだろうか。

次の1. - 3丸山徳子とサルコリとの親子愛については、単独に存在するだけではなく、この、1. - 2ピアノや声楽の指導者としてのサルコリの姿についてにおいても、途切れることなく、継続して存在しているのである。

まさに、サルコリと丸山徳子の間にも、清らかな、人間と人間との、信頼と真実の愛情があったと思われる。

また、サルコリは、丸山徳子に対して、プロのピアニストとしての大成を望んでいた。以下の会話の中でも、そのことが感じられる。

「来年こそはあなたを伊太利へ連れて行って上げる。そこであなたは正式にピアノの修業をするんだ。そして立派なピアニストになって、また、私と一緒に日本へ戻ってくるんだ<sup>25)</sup>。」

また、サルコリに教えを受けて、今日の地位を築いた声楽家として、三浦環、藤原義江、原信子、ベルトラメリ能子(声楽家であった古関裕而の妻金子の師<sup>26)</sup>)、喜波貞子、佐藤千夜子など、錚々たるメン



(昭和初期、サルコリの関谷敏子への自宅でのレッスン風景：丸山洋子氏提供)

バーの名が挙げられている。

また、サルコリの、ヴェルディのオペラ<リゴレット>などへの、自身のオペラ出演の経験から、著名な歌劇場でのプログラムを片手に、その本質について丸山徳子に教えている姿は、オペラを学ぶ者にとって垂涎的であろう<sup>27)</sup>。

### 1-3丸山徳子とサルコリの親子愛について

サルコリにあっては、1-2 ピアノや声楽の指導者としてのサルコリの姿について述べたように、丸山徳子とのレッスンにおいて、親子愛は切り離せないものであったようである。

たとえ、丸山徳子が泣くようなサルコリの厳しいレッスンであっても、レッスンの後、サルコリ、丸山徳子の信頼関係の下、親子の愛情でしっかりとフォローされて、丸山徳子の中で、確固とした学びが成立する状況になっている<sup>28)</sup>。

レッスンを離れても、深い父親としての愛情が、サルコリを貫いており、それは死の床にあっても揺らぐことはなかった。以下に、特にそういったサルコリの心情が感じられる記述の一例について述べることにしよう。

遠いイタリアを離れて、サルコリが、丸山徳子に対する父親としての気持ちを、さらに丸山徳子のサルコリに対する親子愛を吐露する場面がある<sup>29)</sup>。

「……………思い出が、やがていつかとく子さんに対する父親にも似た自分の気持ちに繋がってくる。『……………あなたは私の愛する家族だ。……………私の家族はあなた一人しかいない。ね、あなたは私の娘だね?』」とあり、丸山徳子は次のように答えている。

「ええ、そうよ。わたしは先生の娘ですわ」とある。

また、サルコリは次のようにも言っている。

「……………娘でなくては、あなたのように私を愛し、私を慰め、私のために尽くしてくれる譯がない。私は日本に来てよい事をした。若しも日本に来なかったとしたら、私はあなたと云う自分の娘を見つけることも出来ずに、今頃は全くの孤独と寂寞の中に沈みこんでしまっていたに違いない。……………」と。

こういった親子愛を基盤に、サルコリと丸山徳子の関係は展開しているが、最後にサルコリによって、決定的な愛の行為が示されている。すなわち丸山徳子に対する遺産の相続である。

ここで、お金のことについて言及することがふさわしくないというように、考えることも出来るであろう。

しかしながら、留学、レッスンなど、こと音楽に関しては、勉強にかかる費用には、きりがないのである。

こういったサルコリの行為こそ



(東京都府中市にあるサルコリの墓[管理は丸山家]: 丸山洋子氏提供)

が、丸山徳子の教育への期待であり、総決算であり、親子愛の象徴という見方はできないであろうか。

また、ここで、サルコリの親子愛が、丸山徳子にあっては、ピアノ、声楽などといった音楽そのものを習得している、という事実に結実していくことは、大切なことであろう。

すなわち、丸山徳子に則して言えば、サルコリから与えられた学校教育でも十分通用する音楽科教育の指導法といった音楽科教育や、ピアノ、声楽といった音楽の専門的な学習に関連する教育で、丸山徳子が、十分に音楽で生活していけるという見通しを得ることである。

今日の表現で言えば、サルコリも、丸山徳子の自立を目指していたという立場であろう。

そしてそれは、サルコリ、丸山徳子相互の、盤石ともいえる親子愛に裏打ちされたものであったと言える。

## 2.丸山徳子のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について

以下、2. から 5. において、丸山徳子先生、三浦環先生、鶴田先生、丸山洋子先生のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について、鶴田先生を介して披歴していただくこととする。

藤田 以上、黒の文献を通して、丸山徳子のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について検討してきましたが、鶴田先生からご覧になって、実際にはいかがだったでしょうか？

鶴田 サルコリー先生の音楽観・それを教えることについての考え方について、丸山徳子先生は、次のように話していました。その当時、日本人は、イタリアの歌を聴くチャンスは非常に少なかった時代です。レッスンは、イタリア的ないわゆる明るいひびきを求められました。その声は、発声法にあると、基礎・基本的な練習に明け暮れたことは、間違いありません。

稽古は確かに厳しくありましたが、いい方向に前進すると褒めてくれました。次の技術的な課題と内容表現の課題といつも明確でありました。又、ピアノをしっかりと練習することも求められました。ただ、イタリア大使館で仕事をしていた叔母がサルコリー先生のお手伝いさんを兼ねていましたので、12歳のころから遊びに行き、先生の所に尋ねる多くの先輩声楽家の声を聴きながら過ごしていました。私自身は、サルコリー先生からの要望で養女になり、24歳ぐらいまで本格的に音楽の基礎・基本を教えて頂きました。それも丁寧に。このことは、教育的に考えても、大変恵まれた環境にあったと言えます。そのころの生活がなつかしい限りです。

## 3. 三浦環のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について

藤田 鶴田先生からご覧になって、実際にはいかがだったでしょうか？

単純に考えると、丸山徳子先生にも留学を勧めるというのがこの流れで言うと自然な感じがしますが・・・・・・。なぜ丸山徳子先生は三浦環先生のご紹介で結婚なさったのでしょうか？

鶴田 サルコリー先生は、三浦環先生に一つのことを深く掘り下げる、つまり国際的な声楽家の道



(昭和12年、生涯で唯一三浦環が仲人を務めた、丸山徳子の結婚式の写真二枚:丸山洋子氏提供) に行くことを推奨していました。遡ること明治44年のことです。実は、サルコリー先生は、上海に音楽学校をつくる予定でイタリアから渡る途中、辛亥革命に遭遇し下りることが出来ず、横浜まで来たのです。運とは不思議です。日本を気に入り、東京に住むようになりました。当時、イタリアオペラを目指していた環先生、明治44年末～45年のことですが、サルコリー先生と新設なった帝国劇場でコンサートを行ったのです。その時の環先生は、サルコリー先生の圧倒的なひびき・歌の上手さにびっくりさせられたとのこと。そして、サルコリー先生のところにレッスンに通うようになったようです。

サルコリー先生は、環先生には、蝶々さん歌手として活躍できるよう深いレッスンをし、活躍できるよう励まし、ヨーロッパに送り出したとも言えるでしょう。環先生は、30歳から50歳までヨーロッパやアメリカを中心に世界的に認められた蝶々さん歌手として活躍し、昭和10年50歳の時帰国しました。その時、丸山先生(旧姓;長島)は、25歳になっていました。悲しい出来事が起こりました。サルコリー先生が亡くなったのです。絶望感にくれる丸山先生、応援してくれたのは環先生やサルコリー先生の多くのお弟子さんたちです。サルコリー先生は、昭和11年お弟子さんに囲まれながら見送られたのです。

その後の丸山先生についてですが、環先生は、丸山徳子先生の性格をよく見抜いていたためか、海外での音楽留学を薦めるのではなく、丸山徳子先生には、結婚を薦められました。1年後の昭和12年、環先生がお仲人さんになり、結婚され上海に渡りました。(お母さんが7歳〈この方が洋子さんです〉を筆頭に3人のお子さんを残して亡くなられた丸山氏のもとへ)昭和20年帰国。徳子先



生は、ご自分の考えを大切にされる方で、戦後の誰もが苦しい中、生まれ故郷の近くの小美玉市栗又四ヶで、音楽の素晴らしさを教えながら過ごされ、数年前 102 歳の生涯を閉じられました。

このような流れから、再度、話はサルコリー先生と三浦環先生の関係に戻りますが、音楽科教育の見方を借りれば、三浦環先生は、ベルカント唱法を研究しながらも、自分の個性を生かした歌の表現工夫をし、また、自分の声帯を守る発声法を創意工夫したということは間違いなく、これもサルコリー先生をしっかりと理解していたからと思えてなりません。

#### 4. 鶴田昭則のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について

藤田 サルコリー先生は著名な声楽家であり、一見音楽科教育思想から最も遠くに感じられるのですが、鶴田先生の学校における、教員人生とは矛盾する考え方ではなかったでしょうか？実際はいかがだったのでしょうか？

鶴田 私が、丸山先生から受けたレッスンとして、今でも大切にしている方法の一つとして、カデンツァ発声があります。「ドレミファソラシドレドシラソファミレド——」Cdur から半音づつ高くながら声を出していく方法です。(母音と子音で) 私は、音程正しくレガートに声が出せるよう心がけています。

そして、楽曲を歌う時でも、怒鳴ってしまうような出し方はしないようにいつも注意を受けていました。今、心に残る指導の一つとして、サルコリー先生はこのような声で歌っていたのですとフレーズの歌い方として声をまねさせてくれるのです。丸山先生のレッスンでは、サルコリー先生の歌い方を実際先生が声を出して示してくれました。これこそ、宝であると思っております。

又、レッスンの中では、イタリアの歌のベルカント発声を大切にしている歌手の名を挙げ「真似ることの重要性」をよく話されていました。多分、サルコリー先生もこのような指導をされていたのかなあと思い巡らしています。サルコリー先生・丸山徳子先生の教え方そのものが音楽科教育に繋がっていること間違いありません。

これは、私自身のことですが、小・中学校の児童生徒、時には高校生・大学生を教える機会がありました。特に、音楽の基礎・基本とは何かということ意識して取り組みました。今でも変わっていません。幼少時から好きで歌っていた歌を、高校2年の時、丸山先生にテノールとしての声が認められ、レッスンに通うようになったのです。今でも歌い続け、教え続けていますが、極端な言い方ですが、サルコリー先生・丸山先生からの指令であると思っております。

私が教員生活を続けて良かったと思うことは、教えるということは、年齢などに関係なく共に学ぶことであり、自分自身の専門性を高め・深められることにあると考えています。

#### 5. 丸山洋子のサルコリの音楽科教育思想の理解と継承について

藤田 同じく、サルコリー先生は著名な声楽家であり、プロの方、プロを目指す方以外の方への、自宅での、個人レッスンは、一見サルコリー先生の音楽科教育思想から最も遠くに感じられるのですが、

その辺はいかがだったのでしょうか？なぜ音楽教室なのでしょうか？丸山洋子先生はご自宅でどのようなレッスンをしていらっしゃるのでしょうか？

鶴田 洋子さんが、自宅でピアノを教えるきっかけになったのは、徳子先生が80歳のころ、体調を崩し歌もピアノも教えることが出来なくなり、洋子さんが代わってピアノを教えることになったとのことです。(洋子さんは、幼少時からピアノを弾いていた)それが、今でも続いているのです。

洋子さんは、幼少時から徳子先生をはじめ、多くの歌手の歌を聴く機会に恵まれていましたので、習いに来る方々の表現力を高める指導には、うってつけの先生であるようです。

下記に述べることは、小学校5年生の女の子が学校で弾く校歌のため、洋子さんに教わる一場面です。学校での作文のようですが、「私が教わっているピアノの先生は、90歳ぐらいのおばあちゃん先生です。よく丁寧に教えてくれるのでよく弾けるようになりました。誉めてくれました。先生は本当に元気です。」この作文は、洋子さんから直接見せて頂きましたが、このような内容が書いてありました。これも音楽科教育の原点であるのは間違いありません。

#### まとめにかえて——フレーベルの教育思想である、「父性」に関する考え方を射程に入れて——

以上、2. から 5. の丸山徳子、三浦環、鶴田、丸山洋子のすべての先生方に、形は変わっても、鶴田によれば、サルコリ先生の教育的な考え方、すなわち「サルコリの音楽科教育思想」の理解と継承、展開が見られたということがわかった。

ここではまず、筆者の生涯の研究テーマである、フレーベルの教育思想の「父性」、もしくは「父性愛」について検討し、相対的に見たサルコリの「父性」、もしくは「父性愛」(本論文1. -3では丸山徳子とサルコリの親子愛という表現をとって、「父親」と「子ども」の双方向からの愛情として検討した)について吟味することとする。その上で、本論文でも、深く関係する、昨年度の論文<sup>12)</sup>でも取り扱った①「歴史認識と歴史研究<sup>30)</sup>」の視点と、②三浦環の他の教育的行為への敷衍可能な、指導観、学習観<sup>31)</sup>の視点について検討し、さらに、サルコリの音楽科教育思想、すなわち指導観、学習観について考察をすることとする。

まず、フレーベルの教育思想「父性」、もしくは「父性愛」と、サルコリの「父性」、もしくは「父性愛」についてであるが、以下に、両者の見解を比べることとする。

フレーベルにあって、「父性」、もしくは「父性愛」については、『母の歌と愛撫の歌』の「表紙の図の説明」にあるように、「……………娘の方は成長すればするほど、道を見失いがちなつまづきやすい人生行路で、父親の、男性のしっかりとした保護を必要としています。それで父親の右手は力強く愛する娘をつかんでいるのです……………喜んで父親についていくのです……………その高い本質、男性としての力と威厳、そしてその高い天職を自覚しているドイツの父親の心こそ、第二の絵が象徴的に表現しようとしているものなのです<sup>32)</sup>」とされている。

ドイツとイタリアという国の違いこそあれ、サルコリにあって、フレーベルと同じに、娘は、父親の保護が必要なものと認識されており、サルコリは、理性を失わず、娘を生涯にわたって愛し、見捨てないという考え方を示している<sup>33)</sup>。サルコリの「父性」、「父性愛」は、フレーベルの言う「父性」、「父性愛」と、極めて近似していると言えるであろう。

ここで、昨年の論文<sup>12)</sup>からの流れとして、二点を確認することとしよう。

まず、①「歴史認識と歴史研究<sup>30)</sup>」の視点が挙げられる。これは、時代を超えて残っている実証的な証拠の重要性への認識である。今しか残せない、残すべきものは何か。

本論文においても、鶴田、丸山洋子の、実証的な証拠を残すという行為の正当性と重要性について評価しなければならないであろう。

次に②三浦環の、他の教育的行為への敷衍可能な、指導観、学習観<sup>31)</sup>についてであるが、本論文でも、自分で創意工夫し、破綻の無い、声帯に負担の無い演奏をする、個性を生かすといった、三浦環の指導、学習の在り方は、声楽以外の他の教育的行為の指導観、学習観にリンクする。

最後に、サルコリの音楽科教育思想、すなわちサルコリの指導観、学習観について言及することとする。

まず、指導観であるが、教員は厳しいながらも、教えるべきことを正しく把握し、この内容を必要・十分な形で教えるということが重要になる。

また、教員は愛情に満ちており、教員と生徒の信頼関係の下、生徒は安心して個性を生かし、創意工夫を繰り返しながら、学習を深めるということが肝要になっている。また教員は、生徒が一時的に感情的になったとしても、慰め、励まし、生徒の感情の静まるのを待ち、生徒の希望を十分理解したうえで、模範的な演奏を示しながら(音楽の場合は特に)、わかるように、丁寧に指導をするといった姿勢、そして最後にはよく褒めるといった姿勢も大切になってこよう。こういったことは、すべての教育、指導、学習に共通すると言えよう。

また、学習観であるが、生徒のやる気の継続と学習の定着、達成感の形成については、本論 1. -2 ピアノや声楽の指導者としてのサルコリの姿について、1. -3 丸山徳子とサルコリの親子愛についてに示された、サルコリの示す学習観が、非常に価値を持ってくるであろう。また、この点も、すべての教育、学習に共通することと言えよう。

なお、今後の課題であるが、時代を超えて、敷衍可能なサルコリの音楽科教育思想の理論を深めていく。それと同時にサルコリの実践を行っていくことが求められよう。教員として、学習者に視点を置き、自身の向上を基盤に据えて、創意工夫を繰り返しながら……………。

鶴田先生、丸山洋子先生はじめ、研究に関わってくださった、すべての方々に感謝いたします。

ありがとうございました。

## 注

- 1) 浜野政雄『新版音楽学教育概説』(音楽之友社, 1967), pp.87-132.
- 2) 渡辺陸雄 浅香淳編集『小学校音楽教育講座第 6 巻音楽科基礎指導法 | 歌唱 |』(音楽之友社, 1982), pp.40-55.
- 3) 原田博之「西洋音楽の発声によるうた—日本語の特性を活かした歌唱に向けて」『音楽教育実践ジャーナル』vol.8 no.1 (通巻 15 号), 2010, pp.24 - 30.) の研究。
- 4) 山口(藤田)文子「発声に関する研究:—音楽科教育の立場から発声教育の必要性に鑑みて—」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』(茨城大学教育学部) 第 57 号, 2008, pp.67-72.
- 5) 鶴田昭則、内野健太、藤田香織、山口(藤田)文子「音楽科教育における歌唱指導の研究—

幼稚園, 小・中学校, 高等学校に共通する内容を中心に—」『茨城大学教育学部紀要(教育総合)増刊号(茨城大学教育学部), 2014, pp.67-84.など。

6) 茨城大学教育学部音楽科卒業。公立中学校・茨城大学教育学部附属中の音楽担当教諭、茨城県教育庁指導主事、小学校長などを務めた。イタリアの歌、日本の歌・童謡を研究し、ベートーベン第九のテノールソロを担当。小・中学校の校歌作曲も多数。前茨城大学非常勤講師。茨城県教育研究会音楽教育研究部長、茨城県吹奏楽連盟県南地区会長、つくばで第九実行委員長、ムジカ・ひびき代表、日本の歌・童謡をうたう会代表、音楽教育推進協議会常任理事、茨城大学楽研(音楽専攻)同窓会会長などを歴任。著書・論文も多数。

7) Adolfo Sarcoli 1872 シエナ～ 1936.3.12 東京 イタリアのテノール歌手。イタリア各地でオペラに出演し、名ソプラノのテトラツィニーの相手役もしたが、来日。イタリア・オペラの名曲と、ベル・カント唱法を日本に伝え、声楽界に貢献した(下中弘編集『音楽大事典第2巻』[平凡社, 1982]p.981.参照)。演奏としては、マスカーニ作曲「カヴァレリア・ルスティカーナ」の三浦環、サルコリの二重唱におけるA.サルコリの演奏がある(『伝説のプリマ・三浦環デビュー盤から最後の演奏まで』(VINTAGE, SYC-1001)。なお、筆者はこのCDのA.サルコリの演奏と鶴田の演奏が発声法・表現法共にとてもよく似ていたために非常に驚いた『テノール鶴田昭則イタリア古典歌曲&トスティを歌う(ソプラノ丸山徳子メモリアルコンサート)』(珈琲倶楽部 なかやま, 2014)。なお、A.サルコリの人物紹介については、本論文注5の前掲論文 pp.70,71.に、鶴田によって、三浦環の師、丸山徳子の養父、師として詳しい説明が示されている。参照されたい。

8) みうら たまき 1884(明治17)2.22 東京～ 1946.5.26 同地 ソプラノ歌手。旧姓柴田。1900年東京音楽学校入学、本科声楽科、のちに研究科に進んだ。ユンケルに師事。03年邦人歌手のみによるオペラ公演出演後、東京音楽学校助教授となる。10年帝国劇場歌劇部教師として招かれる。11年<カヴァレリア・ルスティカーナ>部分上演にサルコリとともに出演。13年医師三浦太郎と結婚し、14年夫と共にドイツ留学。第1次世界大戦のため、ロンドンにのがれ、アルバート・ホルのデビューに成功。翌15年ロンドンで<蝶々夫人>に出演、その成功が契機となって渡米。プッチーニの知遇を得る。22年(大正11)帰国。全国巡演ののち、渡欧。35年イタリアのパレルモで<蝶々夫人>出演2000回の記録をつくり帰国。36年歌舞伎座で<蝶々夫人>出演2001回記念公演(本論文注12掲載の論文 p.71. の丸山洋子先生提供の写真参照)。翌年の大阪公演より彼女自身の邦訳歌詞を用いた。彼女の声は清澄で美しく、派手な演技と相まって好評を得た。日本最初の国際的なプリマ・ドンナ。門下には原信子、関谷敏子らがいる。著書に<世紀のオペラ>(1912、大正1)、訳書にベラスコの<歌劇お蝶夫人>(1937、昭和12)がある(下中弘編集『音楽大事典第5巻』[平凡社, 1983]p.2437.参照)。なお、2020年NHK朝の連続小説「エール」の登場人物で、女優柴咲コウが演じた、世界的なオペラ歌手の双浦環のモデルとされている(『NHKドラマ・ガイド連続テレビ小説 エール Part1』[NHK出版,2020],pp.52,53.)。

9) まるやま とくこ 1911～2014 ソプラノ 現茨城県小美玉市宮田に生まれる。鶴田の師。幼少時、先生の父が新聞社に勤めていた関係で家族共々東京で生活する。1911年(明治44年)にイタリアを代表するテノール、サルコリー氏が横浜に渡ってくる。その頃、丸山先生の叔母がイタリア大使館で仕事をしていた。叔母は、その後、東京に住むようになったサルコリー氏のお手伝いさんになる。先生が12歳の時(大正12年)に東京大震災が起これ先生の家が焼失する。そのた

め、先生は東京のサルコリー氏の家に叔母とともに住むようになり女学校に通う。サルコリー氏には何かと気に入られ、後々、先生は氏の養女になる。氏のもとには、ソプラノ三浦環をはじめ多くの歌手がレッスンを受けに来ていた。そのような音楽的環境にあふれる中で、自然に本格的に氏の指導を受けるようになったのである。又、ある時は、東洋音楽学校(現 東京音楽大学)にも通う。時には、小さなコンサートには出演していた。25歳頃まではサルコリー氏にレッスンを受けていたが、1936年サルコリー氏が没する。しばらくして、欧米で活躍していた三浦環が帰国し、オペラ蝶々夫人に蝶々さんが三浦環、スズキが丸山先生と言う共演も実現した。その後、先生は、結婚を機に、上海に渡ったが、そこでの音楽的環境は、太平洋戦争の影響もあり恵まれたものではなかった。戦後、家族共々、生まれ故郷の宮田に戻り、現小美玉市栗又四ヶに住むようになる。戦後のきびしい音楽的事情と家庭的な事情もあり、オペラ活動は、全くしなかった。後半は、声楽(ベルカント唱法による指導)やピアノの指導者として活動する。先生は、つい最近まで存命であったが、2014年1月末日102歳の生涯を閉じられた(本論文注5の前掲論文 p.70.に、鶴田によって、詳しい説明が示されている。参照されたい[筆者付記])。

10) 〈特集・シンポジウム〉「戦後70年と音楽教育史」のなかで、筆者は2015年(平成27年5月)の音楽教育史学会第28回研究大会でシンポジストとして発表した。

11) 本論文注10のシンポジウムの発言をそのまま掲載、さらに内容を精選し、編集委員会の審査の下、筆者は「歴史認識と歴史研究」の視点からの提言を行い、同様の内容も主張した(『《特集》シンポジウム『戦後70年と音楽教育史』』『音楽教育史研究』[音楽教育史学会]第18号,2016,pp.25-59.)。

12) 藤田文子「音楽科における歌唱指導に関する歴史的研究—三浦環の師、サルコリの養女丸山徳子・鶴田昭則のレッスンを手掛かりに—」『茨城大学教育実践研究』(茨城大学教育学部)第39号,2020, pp.69-76.

13) 丸山徳子の娘。サルコリと丸山徳子同様、血縁はなかったが、丸山徳子と親子関係を結ぶにあたって、篤い信頼関係を築いた。現在まで、丸山徳子を通してサルコリの、また、丸山徳子の音楽を継承し、ご自宅で音楽を教えている。生母が亡くなったため、丸山徳子を、母として受け入れるにあたり、長女として、受け入れを真っ先に決断した、先見の明のある重要人物でもある。

14) フレーベルの教育思想に取り上げられた考え方。『母の歌と愛撫の歌』の扉の絵の説明にある。(Friedrich Fröbel *Mutter und Koselieder* [Mitteldeutsche Verlagsgesellschaft, 1982], S.122. (小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』[玉川大学出版部, 1976～1981年]第五卷,『母の歌と愛撫の歌』280,281頁)。

15) 黒百合子「楽人の死」『少女の友』第29巻第7号(実業之日本社,1936,7,1),pp.74-82.

16) 一世を風靡した少女雑誌である。明治41年2月の発刊で、昭和30年6月に突然休刊となった。この雑誌は、通り一辺倒の、良妻賢母推奨のみの雑誌ではなく、ひたすら女子の忍従を説く雑誌でもなかった。内容は極めて豊かで、自由かつ啓蒙的であった。特に読者の投稿に対する『少女の友』側の内容の充実も人気あった。地区ごとに短信欄(トモチャンクラブと命名されていた)があり、投稿には、創刊以来、必ず主筆がコメントをつけていた。読者が主筆を「先生」と呼ぶのも伝統で、「学校の先生ではないけれど、主筆は、人生の先を示してくれる人(『少女の友』創刊100周年記念号[実業之日本社,2009,3,21], p.266.)」としていた。今だにその人気は衰えない。発刊依頼、

多くの愛読者を持っており、亡くなった小説家の田辺聖子なども含めて、年齢を問わず、愛読者は継続的に存在している(前掲書,374頁。発行の辞,pp.8 - 24,p.367.などを参照)。また、投稿者の山下寿子は、「けがれなく純粋であり、何とか精神的に自立したい、従来のもた周囲のしきりに流されたくないという自覚は、はっきりとした形でなくとも芽生えていたと思います。『少女の友』のお陰で(前掲書,pp.264,265)」としている。

- 17) 本論文注 16 の前掲の著作,pp.323 - 332.
- 18) 本論文注 15 の前述の著作,p.77.
- 19) 本論文注 15 の前述の著作,pp.80,81.
- 20) 本論文注 15 の前述の著作,p.76.
- 21) 本論文注 5 に掲載の論文,p.71.
- 22) 本論文注 20 に同じ。
- 23) 本論文注 15 に掲載の著作,p.77.
- 24) 同上。
- 25) 本論文注 15 に掲載の著作,p.75.
- 26) 菊池修一,古関正裕監修『古関裕而・金子その言葉と人生』(宝島社,2020),p.50.
- 27) 本論文注 15 に掲載の著作,p.78.
- 28) 本論文注 15 に掲載の著作,pp.76,77.
- 29) 本論文注 15 に掲載の著作,pp.80,81.
- 30) 本論文注 11 に掲載の著作,p.58.
- 31) 『人間の記録・・・㉔』三浦環 「お蝶夫人」(株式会社日本図書センター,1997)p.115.
- 32) 本論文注 14 参照。
- 33) 本論文注 15 掲載の著作参照。